

フリーテン人生

無邪気な

視点

#05

風景から読み取る農業の歴史

ルな地図を購入すると、遊歩道パブリック・フット・パス (Public Foot Path) が点線で明示されていて、大地主は「一般人が端っこを歩いただけなら開放しましょう」ということになっているのだ。

「この風景の中に『囲い込み』の跡が読み取れるなあ」と日本人が呟くと、「学校でそのように教えてもらえたら歴史も面白かったのにね」と英人が切り返す。

英国生活で週末の楽しみと言え、郊外の散歩。ロンドンから4〜5マイル(6〜7km)ほど南に離れると、グリーンベルトと呼ばれる中途半端な緑園域が点在する。さらに10マイル(16km)ほど離れると、放射状に農地が広がって行く。カルスト地形のなだらかな稜線を彩る畑地と牧草地、飛行機雲の交差する空。陸の緑と空の青とのコントラストで、ドーバー海峡の遙か向こうまで飛んで行けそうな錯覚をってしまうほど心膨らむ英国の心象風景でもある。

英国の歴史で2度にわたって行なわれた「囲い込み」のうち、産業革命の際の労働力を作り出すことになったのは第2次囲い込み後のことだ。で、わずか200年ほど前のことだ。その囲い込みが具体的に読み取れる風景がある。小作農の自給を営むスペースと、その自由を大地主が奪い取り、集約式農地を拡大するために、生け垣ですぎ間なく区画整理した光景は、今なおイングランド中に散逸している。ケント州やサリー州のどこかの丘から小作農家の長屋と大地主の家とを見極めて俯瞰すれば、生け垣の様子で人間を排除した様子がうかがい知れるのである。

「農業革命」が起きた。牧草地を1年中稼働させるために、品種改良、大量生産、そして大量収穫できるシステムが構築されると、やがて増加した人口は当時勃興しつつあった工業都市に流入した。その頃から農地運営の概念に大きな変化はないので、現在の英国の田園風景は世襲の地主制度とあるいは産業革命がもたらしたものとも言える。

彼ら新興貴族の中にも栄枯盛衰があり、今日完全に没落してしまった家族もいれば、東京ドーム10個分以上の敷地に建てられたマナーハウスを相続しても維持費や税金が捻出できず、ホテルやレストラン経営に変わることもあれば、ナショナル・トラストなどの自然保護団体に寄付してしまう家族もいる。

マナーハウスの一面には当時の自給事情のために必ず畑地があり、ここでは今でも小作人や庭師が働いていて、古き良き時代の景観を保っている。マナーハウスもカルスト台地に連なる農地も、どちらも農業に支えられ今後も継続するであろう英国の心象風景そのものである。英国に行くことがあれば、大聖堂や寺院と同様に眺めていただきたいものだ。

マック木下

ゼネコン、商社、航空旅行業、世界的弱電企業などの国際畑で育ち過ぎた50代。1980年代から主に英国に住み、英人が本名をちゃんと発音できなかったのが、いつしかマック木下になった。ジャーナルには無節操なライターで、執筆歴は10年間ほど。専門は日英関係史とロンドンの歴史散歩。寄稿先は『英国特集』『R.S.V.P.』『Quality Britain』『Taste of Britain』『未来教室』『ぼんじゅーるレマン』のほかミニコミや会員誌など。